新宗連スローガン
信教の自由を守ろう
信仰心を広めよう
宗教協力を進めよう
世界の平和に貢献しよう

新宗教新聞

2020年（令和2年）
2月28日
第1123号

発行所
新日本宗教団体連合会
（略称 新宗連）
〒151-0053
東京都渋谷区代々木5丁目57番10号
電話（03）3468－5551〈代表〉
（03）3468－5588〈編集〉
大阪事務所 〒550-0006
大阪市西区江之子島1丁目8番21号111
電話（06）6443－7178

第30期第6回 理事会
―新宗連―

令和2年度 事業計画・予算を決定
本部と総支部・協議会、青年会で実施へ

新日本宗教団体連合会（新宗連、岡田光央理事長）は2月19日午後1時半から、東京・代々木の妙智會教団本部で第30期第6回理事会を開催した。審議事項では令和2年度事業計画案・予算案などを原案通り決定。新年度からの本部ならびに総支部・協議会、新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会、宮口弘道委員長）の新年度の諸事業が実施されることとなった。

理事会は、受け入れ教団を代表して、妙智會教団の斎藤賢一郎理事長のあいさつの後、善隣教の力久道臣教主が昨年12月2日に逝去した新宗連顧問で善隣教聖主の力久隆積師の通夜・告別式（12月5・6日）参列への会葬御礼を述べた。

前回理事会の議事録報告に続き、川端健之常務理事が教団内人事により立正佼成会理事長を退任したことに伴い、新たに新宗連の理事に就任した國富敬二氏があいさつを述べた。

報告事項に移り、中村憲一郎会計委員長が新宗連会館第3次大規模改修工事について、2月14日に竣工検査が終了し、同月中には完成予定であることを報告。また事務局から、新宗連会館を災害時帰宅困難者支援事業の一時滞在場所として申請することを報告した。

続いて、結成70周年特別委員会の委員長に就任した江口陽一常務理事と、同副委員長の石倉寿一常務理事がそれぞれあいさつし、今年6月の理事会に事業大綱案を提案できるよう議論を重ねていくことも報告した。

委員会・機関の前回理事会からの活動や総支部・協議会における教化活動懇談会の開催状況などの報告の後、新宗連青年会の宮口弘道委員長が、平成31年度の活動及び今後の活動予定などを報告した。

このほか、3月25日に開催される日本宗教連盟（日宗連）主催のシリーズセミナー「宗教×SDGs」の第1回「宗教界で進める『こころのユニバーサルデザイン』」について説明がなされた（後日、延期決定）。

審議事項に移り、令和2年度事業計画案及び予算案について審議を行い、原案通り承認した。

令和2年度の計画では「第32回教団人セミナー」「同推協拡大テーマ研究会」「拡大宗教法人研究会」などの開催、また全国総支部・協議会での「教化活動懇談会」を継続して展開、新宗連青年会による第55回「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典（8・14式典）」「ユースフォーラム2020」（新日本宗教青年会北陸連盟受け入れ）の開催や「第10回沖縄慰霊平和使節団」派遣などを実施することとなった。

また、定款の変更が承認され、新たに「参与」を新設し、「役員等」に加える事を決定。役員人事では、川端常務理事の退任に伴い、國富理事が後任の常務理事に就任することを決定した。一連の報告・審議を終えた後、意見交換が行われ、新型コロナウイルスへの対応や、「結成70周年記念事業」などについて真摯な発言が続いた。

妙智會教団の本部を会場に開催された理事会（2月19日）

第31回教団セミナー
社会の変動、新宗教の課題とは
新宗連

新宗連は2月18日午後1時半から、東京・代々木の妙智會教団で「これからの新宗連の役割と活動について」をテーマに第31回教団人セミナー（「栞」参照）を開催した。

今回は宗教社会学・宗教学で博士号を有する新宗連事務局員の隈元正樹氏と武藤亮飛氏が、社会の変動や宗教団体の直面している課題などについて発題。これを受けて、出席した新宗連理事と評議員、教団代表者らが意見交換を行った。

はじめに隈元、武藤両事務局員が発題を行った

開会にあたり、新宗連企画委員会の田澤清喜委員長があいさつ。新宗連歴代理事長はじめ多くの先達から、新宗連の理念を学び、薫陶を受けたことを披歴。「胸襟を開いて語り合うことの実績を作っていただいてきた」として、その一つが教団人セミナーであることを説明した。

また、昨年4月からは全国の総支部・協議会で教団の枠を超えて平和を願う人々が信仰を語り合う場として「教化活動懇談会」が開催されていること、さらに教団人セミナーの内容検討を通して、企画委員会の議論も深まっていることも述べた。

〈家族〉形態、現代人の宗教観で発題

隈元正樹事務局員は「〈家族〉と新宗教」をテーマに発題。〈家族〉（＝近代核家族）の特徴を、日本の伝統的親族組織であるイエ（家）と比較しながら整理し、「新宗教は〈家族〉の誕生とともに生まれ、発展してきた」と述べた。

戦後直後から高度経済成長にかけての新宗教発展期は、地方農村から都市への大規模な人口移動があり、主に次三男が都市で新たにつくった〈家族〉が初代会員に多く見られた。零細商工自営と家族従業者、サラリーマン家庭の専業主婦がその中心だった。

ところが今、日本の家族は転換期を迎えつつある。共働き世帯が多くなり、晩婚化と少子化や離婚、生涯未婚者が増えている。歴史を振り返ると、江戸時代までは結婚や出産をしている人は限られており、離婚も多かった。現在の家族はある意味では「先祖返り」とも言え、新宗教発展の基盤にあった「〈家族〉形態が、むしろ歴史的に特殊であったかもしれない」と述べた。

現在、専業主婦の活動に支えられた教会運営は厳しくなっている。また、専業主婦を対象にした生活指導や教えの一部も「時代に合わなくなっているのではないか」と問題提起した。最後に、新宗教の「再歴史化」として、その普遍性と時代背景の限界を再検討すること、教えや教会の生活指導的側面を時代に合わせていくことなどを提案した。

発題への感想や信仰、布教について活発に意見を交わす

武藤亮飛事務局員は「現代の宗教観と人間関係―新宗教コミュニティの現状と今後を考える」をテーマに発題。各種アンケート調査の結果を示し、若者の「宗教離れ」は本当に起こっているのかと問いかけた。

意識の面では、約6割が「先祖を尊ぶ」と答え、約7割は「宗教心は大切」と答えるなど、若い世代を含め、現在でも高い割合であり、ここ数十年大きな変化は見られない。また行動の面でも、「盆・墓参り」は約8割、「初詣」は約7割と、これも高い割合を維持している。一方、読売新聞などの調査を示し、かつて年齢を経るごとに高まっていた信仰心が、以前ほどは高まらなくなっているとして、「問題は若者の宗教離れではなく、中高年が信仰に目覚めないことかもしれない」と説明した。

とはいえ、宗教心や諸実践が教団への所属に結びついていない現状について、宗教の多元化、「コミュニケーション重視とコミュニティ離れ」などが要因として考えられるとした。特に、伝統的なしきたりや型がなくなったことにより、互いの性格や好みなどに気遣い、コミュニケーションすることが必要となっており、その面倒さからコミュニティが敬遠される。他方で、祭りや音楽フェスなど一瞬の一体感が感じられる瞬間的なコミュニティが若者らに人気であることなどについて説明した。

最後に「何のための、誰のための宗教団体か」を改めて考える必要性を指摘し、時代に合わせることが必ずしも正しいとは限らず、「教団が何を大事にしていくかの選択の問題ではないか」と述べた。

発題を受けての質疑の後、4グループに分かれて意見交換を行い、発題に対する感想や、自身の信仰体験、教団の布教、提言など活発な意見を交わし合った。

閉会あいさつで、企画委員会の力久道臣副委員長は、新宗連の先達の宗教協力、世界平和への思いを引き継いでいくことの大切さをあらためて述べるとともに、「信仰継承や教団運営について、各教団の方々から多くのヒントを頂けるのが教団人セミナーの良いところではないか」と述べた。理事会でも意見交換の場を持つようになったことから、「こうした場をさらに重ねて、次世代の子や孫に何を継承していけるかを学んでいきたい」と語った。

《今号の紙面から》
〈2面〉「健常者」が少数派になる世界を体験―「バリアフルレストラン」を開催
〈4面〉生活困窮者の自立支援、共同住宅「シェアハウスこうじゅ」が開所し、シンポジウム

酒々抄
災難続発の世相に思う
警鐘を鳴らし、世の中照らす努力を

近年我が国は次から次へと天災人災感染症やらと、これでもかこれでもかと災難続発。一体どんな事になるものやらと、どなたも不安を募らせているのではないでしょうか。それぞれの対処策が気になる所です。

言う迄もなく各問題に於ける解決策、対処策の決定権の大半は、各議員の皆さんを始め官公庁に委ねられる所ですが、その肝心要のその方達の働きは如何に、果たして迅速且つ適切なる対応策になっているのでしょうか。

早急に推し進めるべき問題をそっち除けにして桜を見る会がどうの、総理の野次がどうの、会議の欠席等も含め揚げ足を取る事ばかり。無論それなりの反省すべき点があるにせよ、どちらが優先事項なのかと。

これらの問題に限らず、携わるべき責任ある方達の資質の問題が問われはしないのかと、知識、認識、常識、道徳の不足、得手勝手で一般人が起こす問題なら未だしも、国を代表する国の根幹に関わる方達からつまらぬ問題を起こし、マスコミを騒がせおるのは如何なるものかと、お粗末すぎはせぬかと思わざるを得ず、職務柄を考えても心底国を護持する気概を持ち併せているのかと問い正したい思いに駆られます。

目先や欲、地位や金に捉われ、時に気儘となりて国を代表する人間として恥ずかしくはないのかと……。

語弊があるやも知れませんが、つまらん事で騒いでいる暇にもっと大事な事の議論をすべし。本気で命懸けで職務を全うせよ、と声大に叫びたい心境です。

こんな状況の中ですから、私達もそれ相応に如何なる事にも覚悟を定めて用意周到と、当然ながら心掛ける事が必要不可欠。何が起ころうとも慌て不為く事のない様、危機感をもって「備えあれば憂いなし」の心掛けを、と願わずにはおられません。

私達信仰者が何事に於いても方向を誤る事のない様、警鐘を鳴らしつつ、尚にも力合わせて世の中を明るく照らし続ける努力をせねばと己の心に言い含めております。

（保積敬子・大和教教祖）

3月25日の日宗連セミナーは延期に

3月25日開催の日本宗教連盟（日宗連）主催のシリーズセミナー「宗教×SDGs」は、新型コロナウイルス感染防止のため、延期することとなった。

〈訃　報〉

大三輪教管長　迫泓師

新宗連加盟の大三輪教（本部＝奈良県桜井市三輪）管長で代表役員の迫泓（さこ・ひろし）師が1月23日午前7時30分、逝去された。享年81歳。

通夜は1月24日午後7時から、告別式は25日午後1時から桜井市の一さくら会館」で執り行われた。喪主は迫師の後継者、幸田吉晴氏。

新宗連元評議員、解脱会名誉顧問　岡野正師

新宗連元評議員で、解脱会名誉顧問、岡野御本家当主の岡野正（おかの・ただし）師が1月28日午後11時55分に逝去された。享年88歳。新宗連では、教団理事長を務めていた1998（平成10）年から約8年間、評議員を務めた。

通夜は2月4日午後6時から、告別式は5日午前11時から北本市の自宅で執り行われた。喪主は長男の岡野茂樹氏。

教団人セミナー　教団人セミナーは、新宗連が結成10年を迎えた1961（昭和36）年に第1回が開かれて以降、時宜に応じて教団の運営や組織の在り方、また時代社会の課題などについて、外部の識者あるいは加盟教団代表者らが講師を務め、開催してきた。これまでのテーマは、新宗教とは何か、新宗連活動の原点と歴史、「8.14式典」の意義、教団人の使命、日本人の死生観、無縁社会、憲法改正など多岐にわたる。新宗連の理事・評議員など役職者や加盟教団代表者らが忌憚のない意見を交換し合う場ともなっている。（1面）

宗教をめぐるさまざまな問題のご相談窓口
宗教もしもし相談室
03 3466-9900
受付●月曜→金曜／正午→午後4時
公益財団法人 新日本宗教団体連合会

解脱会伝記編纂委員会編
新版 解脱金剛伝 全3巻
A5判 上製函装 定価3000円（税込み）
世相善導、人心救済への道筋を説かれた解脱会会祖・解脱金剛（岡野聖憲）の生涯を全1549頁、3巻に収めた。会祖亡き後、その人格に触れて自らの内に深い帰依心を培い、世のため人のために生きるための学びの土台となる書。第1巻＝生誕から事業の失敗、大成を経て宗教の世界に目覚めていく前半生を描く。第2巻＝昭和4年に立教して以来、人心救済の道一筋に生き、教えの土台を完成するまでの事績を辿る。第3巻＝戦時下の厳しい時代の中で縦横無尽に教えを説き、救済活動を展開し、遷化されるまでの歩みを記す。
解脱会
〒160-0007 東京都新宿区荒木町4番地
TEL 03-3353-2191(代表) Fax 03-3353-3055

清文社
宗教法人の税務調査対応ハンドブック〔宗教法人税制と法制の解説を含めて〕
石村耕治 編
A5判3780円
平成25年からの新・税務調査手続にも対応！
宗教法人と税務調査についての基礎知識を中心に整理し、コンパクトに解説した、実務家・宗教関係者必携の一冊。
公益財団法人 日本宗教連盟推薦！
〒101-0047 千代田区内神田1-6-6
☎03(6273)7946 FAX03(3518)0299
http://www.skattsei.co.jp〈価格税込〉

芸術生活社【芸生文庫】
高齢期を快く生きるための“人生の道しるべ”
老春誦歌（ろうしゅんおうか）
長生きの秘訣
御木徳近著　パーフェクト リバティー教団第二代教祖が、宗教家として悟りと長い人生経験、多くの人との出会いから、高齢期を心豊かに暮らすための新しい生き方を提唱する。■定価700円（税込）
〒150-0047東京都渋谷区神山町16-1
電話03-3469-1153 FAX03-3465-6867

南雲堂
美容と健康寿命の秘策！
認知症予防★お口の体操
『みんな笑顔、みんな元気！』DVD
監修・作詞：太田哲二　作曲：森重恭典／歌・実演：恵中瞳
（体操解説・歌詞収録のブックレット付）
定価（本体2000円＋税）
●収録内容（歌と体操の実演）
▣アッカンベー体操／舌の動きや首を回して、筋肉を活性化させて、リンパの流れを良くする。▣パタカラ体操／魔法の言葉『パ・タ・カ・ラ』を使って口を大きく動かして脳に刺激を与え、認知症予防！▣ラップ・ラップ体操／早口言葉や落語の寿限無をラップのメロディにのせて歌うことで手・眼・口・全身の運動機能を向上させる。
〒162-0801 東京都新宿区山吹町361
☎03-3268-2311 FAX 03-3260-5425
http://www.nanun-do.co.jp/

校成出版社
作家・立松和平による記念碑的労作
【現代語訳】
はじめて読む法華経28品
深遠な教え、華麗な物語世界へ
立松和平 著
『諸経の王』と呼ばれる『法華経』。その全28品を初学者にも分かりやすく親しみやすい文体と、著者ならではの視点からダイナミックに描きだす。仏教入門書としても好適。
●四六判／348頁
●本体2200円＋税
〒166-8535 東京都杉並区和田2-7-1
☎03(5385)2323 FAX03(5385)2334
https://www.kosei-shuppan.co.jp/

白馬社
合掌ができない子どもたち
浄土真宗本願寺派福賢寺住職 三上章道
『本願寺新報』の編集長を二十年に亘って務めてきた著者が、合掌ができない子どもたちとの出会いを契機に、戦後の日本社会が戦慄すべき「薄縁社会」となったプロセスを追い、その原因が宗教心の喪失にあることを解き明かす。そして新たに現出した「原発問題」にも、同根の原因があることを洞察していく。日本人の心の問題にするどく迫り、根本的解決への提言をまとめた必読書。
四六判 定価1260円
〒612-8469 京都市伏見区中島河原田町28-106
TEL 075(611)7855 FAX 075(603)6752
http://www.hakubasha.co.jp 価格税込

ハーベスト社
東日本大震災後の宗教とコミュニティ
星野英紀・戸山達也編 本体価格7200円＋税
東日本大震災後の福島県いわき市と相馬地域のコミュニティの再建における宗教の役割（避難場所としての宗教施設、宗教教団や宗教者の動向など）を解明する
療術から宗教へ
世界救世教の教団組織論的研究
隈元正樹著 本体価格3000円＋税

緊急出版 カトリック大阪教区神父 西山俊彦
平和憲法が平和への道、改憲は戦争への道
―わたしたちが核戦争の加害者とならないために―
世が平和ボケにあろうとも、「時すでに遅し」と後悔しないために、平和憲法の真価を見直す素養まで捨てるわけにはいかない。
●1400円＋税 四六判並製
248頁 ISBN 978-4-286-19691-6
文芸社
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
☎03-5369-2299 FAX.03-5369-3066
https://www.bungeisha.co.jp
書籍のご注文はお近くの書店またはブックサービス☎0120-29-9625、ネット書店まで

話題

「健常者」が少数派となる世界を体験
バリアフルレストラン（トライアル版）開催
「チーム誰とも」日本ケアフィット共育機構

東京オリンピック・パラリンピックの年を迎え、「共生社会」実現へ向けた社会的関心がひときわ高まっている。新宗連でも5月に「同推協拡大テーマ研修会」で「障害者差別解消法」の学習会を行うほか、6月の新宗連青年会ユースフォーラムでは「インクルーシブ社会」（誰も排除されない社会）をテーマとする。

障害は事故・病気などによる後天的なものも実は多く、老いれば体の不具合を抱えることになる。決して人ごとでないだけでなく、多様性のある社会が今求められている。

広報用写真より

公益財団法人・日本ケアフィット共育機構（畑中稔代表理事）は、主に企業や法人向けに、障害者や高齢者に対する適切な介助技術の開発、研修を行い、「サービス介助士」資格を認定している。現在、同資格取得者は、全国1000社18万人にのぼるという。

このほど、同機構では「共生社会」実現に向け、新たな2020年活動戦略「チーム誰とも」（誰もが誰かのために共に生きる委員会）を発表。企業、法人向けに確立してきた各プロジェクトを、広く一般向けに公開する最初の企画として、2月13～15日、東京都文京区の東京大学で、車いす利用者が少数派として感じている日常の体験を、仮想世界を通じて「健常者」（二足歩行者）が体験する試み。

天井やテーブル、備品など、すべて車いす利用者に合わせ設計されたバリアフルレストラン

この仮想世界では、二足歩行者が少数派（障害者）となる。

会場に特設されたバリアフルレストランは、天井・テーブルの高さ、トレイや食器、卓上の備品、床など、すべて車いす利用者にとって便利なように設計されている。「二足歩行障害者」は、車いす利用の「健常者」である店員の「配慮」や他の車いす利用「健常者」の客の冷たい視線を受けながら、食事をする。

店員同士の何気ない会話も、通常と反転した世界になっている。例えば「今日、二足歩行者多くない？」「何かイベントかな」という具合。店員や客役を演じる車いす利用当事者らが、現実の社会で実際に体験したことがヒントになっているという。

狙いは「多数派にとって当たり前」あるいはその前提のもとの配慮という社会の在り方に気付き、考えること。近年認知されてきた「障害の社会モデル」を理解する手掛かりともなる。

体験学習でよく行われる目隠しや車いす体験などは、体に負荷をかけるという意味で「個人モデル」的発想に基づいている。その点で、「社会モデル」に基づき環境を変えてしまう「バリアフルレストラン」はユニークで貴重な体験。

10月にレストランの改良版を含めた各種イベントを企画中。詳細は「チーム誰とも」ホームページに(https://dare-tomo.team/activity/)。

人様の喜び 幸せのため
第83回教主誕生祭 円応教

円応教（深田充啓教主）は2月9日午前10時半から、兵庫県丹波市の本部・本殿で深田充啓教主の「第83回誕生祭・2月例月祭」を行った。

はじめに三重1・2・3教区の担当による奉祝演芸が行われた。太鼓「ひびき」の迫力ある演奏でオープニング。続いて今年の干支である子（ね）にちなみ、オペレッタ「ネズミの嫁入」を信者がそれぞれ劇の役に扮して演じた。その他、南部俵積み唄や日本花咲か音頭、親子龍の舞など、深田教主の誕生を祝い、円応教の隆昌発展を祈願する催し物が演じられ、会場は大いに盛り上がった。

この後、深田教主と静子夫人が登壇。教主夫妻に祝いの言葉とともに、花束が贈呈された。

午前11時半からは、深田教主の主導師の下、「誕生祭・2月例月祭式典」が営まれた。「本部参拝長寿お祝いの記念品贈呈式」の後、全信者を代表して中村史郎理事長が奉祝の言葉を述べ、深田教主に記念品の目録を贈呈したほか、教会長会、布教師会からも記念品の目録、青年信者代表からは深田教主夫妻に花束が贈呈された。

この後、深田教主が「御親教」。経典の199項を引いて、「御教祖様も、人様のお役に立つためには、健康でなければならないと言われていた」として、自身も昨年肺炎を患ったことを省み、「改めて健康の大切さをかみしめた」と述べた。

その上で、人様の役に立つために「何事においても『できない』ではなく、まず『はい』と受け、精一杯させていただくことが一番大切です」と自らが努力、精進することの重要性を説き、「共に健康に感謝し、人様の喜び、幸せのために努めてまいりましょう」と呼びかけた。

続いて、深田教主はじめ責任役員、理事らが全信者の無病息災を願い、「福は内」の掛け声とともに「招福豆」をまいた。

午後1時15分からは、五法閣1階を会場に、奉祝パーティーが催された。ラウンジに特設された舞台に、深田教主らが入場。信者代表の祝辞の後、深田教主夫妻へ青年信者代表による花束贈呈が行われ、これを受け、深田教主が謝辞を述べた。続いて鏡開き、乾杯が行われた。

円応ウインドオーケストラ、ウクレレ部の演奏などが続き、全員で「ハッピーバースデー」を、最後に「教主様御誕生奉祝歌」を捧げた。

式典の後の奉祝パーティーでは鏡開きが行われ、乾杯した

親へ感謝する機会に
第50回教主誕生祭 善隣教

善隣教（力久道臣教主）は2月4日午前10時半から、福岡県筑紫野市の本庁聖堂で「第50回教主様誕生祭」を挙行した。

鉦が鳴り開式が告げられ、献饌御奉膳献納の後、力久道臣教主と力久美雪継主が臨殿。教主が御神尊前に進み祭文を奏上した。参列者一同が「御璽経」を唱え始めると、教主が鎮魂瑞などに入魂の儀を行った。

そして、教主が神前に供えられた力久隆積聖主（故人）が使用していた聖衣を奉持して継主に受け渡した後、一旦退座。継主が奉持した聖衣は教師に委託され、教主のもとに運ばれた。

聖衣をまとい御慈光を照射する力久教主（左から2人目）

参列者が太鼓と拍子木の音に合わせて一心に「天地一切一心正念経」と「御璽経」を唱え続ける中、聖堂内が暗転、聖主から奉戴した聖衣をまとった教主が再び臨殿した。教主は右手を高く掲げて満堂の場内を一巡し、参列者に向けて御慈光を照射した。

御神尊（みおや）賛歌の合唱、信義五ケ条、信仰標語、「みうた」奉唱の後、教主と継主、教団代表者と来賓の妙智會教団・宮本泰克氏、信徒代表者が「捨身誓願の松」を奉奠した。

祝賀式に移り、力久教主の聖務50年を振り返る映像放映後、武廣茂樹理事長による「式辞」、バースデーケーキと花束の贈呈、教団理事による祝辞、祝電披露と続き、力久教主の50歳の誕生日を参列者全員で祝福した。

原点に返り浄行の実践
開教82周年式典 思親会

思親会（飯島法道会長）は2月11日午前11時から、神奈川県伊勢原市の思親大宮殿・大孝堂で「開教82周年式典」を厳修した。井戸清行開祖（思親清行大士）の親族はじめ、遠隔地の会員も感謝と報恩の思いを胸に参集し、満堂となった。

第1部は、はじめに婦人部、青年部により厳かに献灯・献供が行われ、飯島法道会長を大導師に「ご供養」が厳修され、参列者の読経の声が響きわたった。

満堂となった大孝堂で「ご供養」を厳修

第2部では会員代表法話。三度のがんを通し自分の〝我〟の強さを、がんで亡くなった妹が身をもって教えてくれたこと、亡き母の面倒を看てくれた妹の苦しかった心情を思いやれなかったことを懺悔する日々を過ごしたことを話し、大きな拍手が送られた。

続いて飯島会長が登壇し、「御親教」。純粋に法華経を学べば学ぶほど、すべての事柄は因果の理の上で寸分の狂いなく生じていることが分かると述べた。その上で「今、目の前にある困難は自分の怒りや貪りや愚痴、許すことのできない心から生じていることを知り、その原因となる相手の存在こそが自らを修行させていただける存在であり、また相手の仏性を心から礼拝することで、自身の懺悔や感謝の念に気づくことができる修行であると確信を抱いていること」と説いた。

式典を通して参列者は、井戸開祖が戦中戦後の日本の混乱期、思親会を開教した思いを正しく理解し、その「御教え」の原点に立ち返り浄行の実践を継承し、法華経広布に向けて第一歩を踏み出す日となった。

70年に向け ご法に精進
立教69年祭 妙道会教団

「御親教」に立った力久教主は、聖主の帰幽（昨年12月2日）に際し、生前の宗教界における親交や厚情への感謝として、新宗連に対する特別寄付を奉納することを発表し、岡田光央新宗連理事長宛の目録を、祭典に参列した大滝晃史新宗連事務局次長に授与した。

そして「誕生祭は親へ感謝を捧げる日、一人で生きているのではなく生かされていることに目覚め、信徒一人ひとりも親へ感謝する機会にしていただきたい」と、誕生祭の意義を説いた。

また教主継承から10年を迎えたことを述懐しながら、聖主が身に着けてきた聖衣を奉戴したこと、聖主がすべての人の幸せを一心に念じて、行じ、祈り続けていたことなどを伝えた上で、信仰の原点である「祈り」の在り方をよくみつめ、「すべての人の幸せを祈る信仰に徹する」という、令和2年の信徒活動スローガンの意義を説いた。

妙道会教団（佐原慶治会長）は立春を迎えた2月4日午前10時半から、大阪市天王寺区の大聖堂で「立教69年祭」を厳修した。

祭典は修祓が行われた後、玄題三唱をもってご法殿が開扉。女子部員による献灯の後、導師入場。佐原慶治会長が登壇し、献香に続いて祭文が奏上された。立教の原点、「両聖師さま」と仰ぐ教団を開創した佐原忠次郎師と佐原俊江師、先達導師の足跡に思いを馳せ、感謝を込めて読経。この後、導師位授与、教会役員委嘱の儀を迎え、導師代表に佐原会長から委嘱状と念珠が手渡された（写真）。

堂内が暗転し、静想の時を迎え、次いで佐原会長が「ご教示」に立った。来年立教70周年の節目を迎えることに触れ、これまで先達の献身的な活動により支えられてきたことや、両聖師が法華経に出会ってから立教までの16年間の時間も教団の大きな根源であるとし、「目に見えない尊い足跡があって今日の教団があることを自覚していただきたい」と述べた。その上で「立教70周年に向けて、本年はより真摯な気持ちでご法活動に臨んでいただきたい」とのさらなる精進を願った。

聖訓・三大誓願を奉唱してご法殿が閉扉。会歌斉唱をもって閉式した。この日、参拝者には招福餅とご神酒が、導師会員には記念の「おうどん」が手渡され、決定も新たに両聖師立教の本懐をかみしめた。

与えて求めぬ心 子々孫々に
太陽精神碑建立記念祭 解脱会

解脱会（本部＝東京・四谷、岡野英祥法主）は2月11日、埼玉県北本市の御霊地で「第81回太陽精神碑建立記念祭」を執り行った。岡野聖憲会祖（解脱金剛尊者）は1940（昭和15）年2月11日、地上の万物を平等に育み、与えて求めぬ太陽の心、無私大愛の精神を表象して「太陽精神碑」を建立した。以来、毎年、建国記念の日に式典を挙行している。

快晴の下、午前10時から太陽精神碑前で第1部式典を執り行った。五穀をはじめとする供物や供花、灯明などで荘厳した太陽精神碑前に、教団役員と全国から参集した会員が整列。岡野英夫理事長が「奉告文」を奏上し、参列者全員で「拝礼行事」を行った（写真）。

「御霊地」に会場を移し、7教区の鼓笛隊パレードの後、午前11時15分から第2部式典を開式。国歌と「太陽精神碑の歌」斉唱、解脱金剛尊者の「み声」（録音）拝聴に続き、岡野理事長が「日の丸」前に進み「誓願文」を奏上した。続いて、岡野理事長が特設舞台に登壇し、参集した参列者に向かって「式辞」を述べた。

建国事業を成し遂げた先達の苦労と功績を称え「祖先の偉大な精神力を学ぶ記念日」と述べ、その精神が令和の時代まで継承されていることを踏まえ「私たちが、その精神に違うことなく生活を律し、伝統を継承し日本精神を子孫に伝えていかなければなりません」と記念祭の意義を説いた。

また「太陽精神」に基づく、神仏を敬い尊ぶ家庭の姿が失われている現状を指摘し、解脱金剛尊者が説いた「在家宗教」としての教団使命を確認して、「令和の御代を麗しく美しいものにするために、日本の各家庭に神を祀り、ご先祖の御霊をお迎えすることを提唱し、与えて求めない太陽精神を子々孫々に伝え、日本から世界に羽ばたく有意な人材が育つよう努めましょう」と結んだ。

新宗連 総支部協議会

教化活動懇談会―グループに分かれ信仰体験話し合う
四国総支部

全国の総支部・協議会で展開をしている教化活動懇談会。昨年11月7日に四国総支部（飛田貴義会長）が開催した。

四国総支部では定例の総務会にあわせて開催。参加者が数グループに分かれ、それぞれの信仰に入った状況や導かれたきっかけなどを話し合った。参加者からは「縁になった教団は違えども、信仰に導かれたきっかけがとても似ていて共感ができた」「これまで顔を合わせてきたが、それぞれの方の信仰へのきっかけの話が聞けたことがとても有り難かった」などの感想が聞かれた。

【諸会議 報告】
「8・14式典」の基本方針など令和2年度事業を審議
新宗連青年会

新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会、宮口弘道委員長）は1月23日午後2時から、東京・代々木の新宗連会館で平成31年度第5回委員会を開催した。

令和2年度事業の推進について審議し、第55回「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典（8・14式典）」の重点課題や全体構成について意見交換を行い、基本方針を承認した。続いて、「ユースフォラーム2020」の準備進捗状況を確認した後、第10回沖縄慰霊平和使節団について、3人の委員で実行委員会を組織して行程や内容の素案を構築することを申し合わせた。

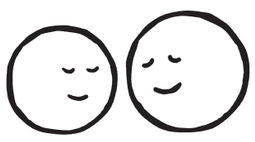
さらに、「第9回青少年育成セミナー」の内容を協議するために、前回内容の振り返りと意見交換を行った。これを踏まえ次回委員会で具体的な内容を検討することとした。

理事会に向け令和2年度予算案について協議
会計委

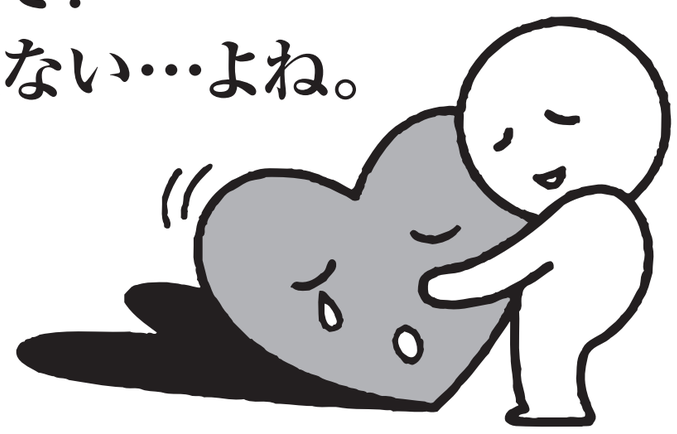
新宗連会計委員会（会計委、中村憲一郎委員長）は1月29日午後2時から、東京・代々木の新宗連会館で第30期第7回会計委員会を開催した。

1月17日の事業計画策定会議で検討された「令和2年度事業計画案」について説明があり、同計画案に基づき、予算案について協議。2月19日開催の理事会へ提出する予算原案を作成した。

ひとりで悩まず電話して！
ホントにつらい時って誰にもいえない…よね。


●東京自殺防止センターは国際ビフレンダーズの一員です。
●私たちは国際ビフレンダーズ憲章に沿って活動しています。

●必要に応じて面接をしています。
●手紙でのご相談にも応じています。
●秘密は守られます。
●相談は無料です（通話料はかかります）。
●金銭的な援助はできません。
●医療・法律・教育関係の助言や指導は、専門家にお願いします。
●特定の思想・宗教・政党などとは一切関係ありません。



NPO法人　国際ビフレンダーズ
東京自殺防止センター
03-5286-9090
年中無休、夜8時から翌朝5時30分まで
火曜は夕方5時から翌日2時30分まで
木曜は夜8時から翌日2時30分まで
〒169-0072　東京都新宿区大久保3-10-1 日本基督教団シロアム教会内
事務局電話番号　03-3207-5040（FAX 03-3207-5098）

●全国にある他の自殺防止センター
国際ビフレンダーズ 大阪自殺防止センター
06-6260-4343　毎週金曜、午後1時から日曜、午後10時まで
国際ビフレンダーズ 宮崎自殺防止センター
0985-77-9090　毎週日曜・月曜・水曜・金曜、午後8時から午後11時まで
国際ビフレンダーズ 岩手自殺防止センター
019-621-9090　毎週土曜、午後8時から午前0時まで
国際ビフレンダーズ あいち自殺防止センター
052-870-9090　毎週金曜、午後8時から11時まで

節分行事 各地で執行

春の節目―厄を祓い 一年の幸せを願う

一年の運気と心構え説く

真生会

真生会（田中庸仁会長）は2月2日午前10時から、岐阜市彦坂の総本山真生寺で「厄除け節分祭」を執り行った。

本堂での田中庸仁会長による魔除けの「切り火ご神事」から始まり、祈祷の読経供養が厳修された。企業・団体の事業繁栄、無事安全の祈祷と共に、祈祷者一人ひとりの氏名が読み上げられ、一年間の無病息災、身体健全の祈りが捧げられた。

全員が献花を奉納した後、浄めの「ご神酒」を拝受。続いて、田中会長が「ご真教法話」に立ち、「今年の天の気・庚（かのえ）は、物事が改まる更新（ね）の意味があり、地の気・子は、一と一の組み合わせであり、何かが終了し、新しいことが始まる意味があり、人の気の七赤金星は、少女の活躍が注目されると共に優しさが大切となる」と一年の運気と心構えを説いた。

この後、本堂前の特設ステージから、田中会長らによる福引入りの福豆まきが盛大に行われ（写真）、会員信徒と共に近隣からの参拝者で賑わった。

心の鬼 我欲をとる導きを

妙智會教団

妙智會教団（宮本惠司法嗣）は2月3日午後1時から、東京・代々木の本部本殿で「節分追儺式」を執り行った。

宮本惠司法嗣が須弥壇の導師席に着座し、玄題三唱に続き、祈願文を奏上した。祈願文では年男・年女・厄男・厄女、さらに信者一同の安寧を祈念、また今年は宮本ミツ会主の誕生120年、教団が創設した国際NGO・ありがとうインターナショナルの設立30周年を迎えることを奏上した。

さらに「妙智會は心の中に棲んでいる鬼を成仏させる教えでございます。その鬼とは我欲の根性です。その我欲をとるために、お導きをするのです」との会主の指導にふれ、「その心の中の鬼を成仏させるため、妙智のみ教えを深く信じ家庭の中に正しい先祖供養を浸透させます。そして『和願愛語』を保ち続け、日々『かえりみる』ことを肝に銘じ、お導き修行を徹底することを固くお誓い申し上げます」と力強く奏上した。

参列者一同による読経の後、祝電披露と来賓あいさつが続いた。

宮本法嗣が「ご指導」を行い、会員の15日間にわたる寒修行をねぎらい、「私も寒修行をしている中で、一人では大変な修行でしたが、皆さまと一緒に修行していると思い、15日間の寒修行をさせていただくことができました」と述べ、節分追儺式にあたり、「遠慮無く欲を出してください。私がその欲の根性を成仏させますから」と力強く指導した。

「追儺の儀」に移り、はじめに宮本法嗣が須弥壇に向かい福豆をまいた後、来賓と共に特設舞台から満堂の参列者に力いっぱい福豆をまいた（写真）。大講堂2階席と地下1階の修行道場でも福豆がまかれ、各会場とも熱気に包まれた。

念じて信じることが大切

晃妙寺

晃妙寺（松本晃芳法主）は2月3日午前11時から、大阪府枚方市の本部本殿で「星祭節分大祭」を斎行した。団扇太鼓が打ち鳴らされる中、導師の松本晃芳法主と脇導師が入場し、読経供養を行った。松本法主が祈願者一人ひとりの名前を読み上げ、諸願成就を祈念し、団扇太鼓に合わせて題目が唱えられた。

松本法主は「法話」の中で六波羅蜜を解説し、特に心を静めて一つのことに集中する「禅定」の大切さを説いた（写真）。また、近年の気候変動の影響で農作物の生育が不安定だが、「感謝して何事もありがたくいただくことが大切です」と語った。そして昨年12月に新居を探している人からの相談を受けたところ、「当月中に必ず家が授かる」と答え、念じていたところ、その通りになったという体験を話し、所願成就のためには「念じて信じることが大切です」と参列者に語りかけた。

この後、袴（かしも）姿の信者代表4人が御神酒を拝受し、参列者に向かい豆を手渡すようにしながらまいた。さらにあらかじめ引いた「くじ」によって景品が授与された。

前日午後6時からは「星祭」が本殿で営まれ、境内の一角で護摩木が焚かれ、諸願成就を祈願した。

相手を尊び、重んじる

天心教

天心教（天元教主）は2月3日午後2時から、大阪府羽曳野市にある古市本庁の神前で「節分星祭大祭」を斎行した。

太鼓の合図で斎主の天元教主と斎員3人が入座し、修祓、身祓祝詞、開扉、献饌、大祓祝詞を奏上。天元教主が猿田彦大神祝詞を奏上した後、猿田彦大神を模した面をつけ、平伏する参列者に向かって神刀を振るい、除魔招福を願った（写真）。

続いて祭員が「神詞」を、天元教主が「節分詞」を奏上した後、玉串奉奠を行った。この後、豆まきとなり、参列者にぜんざいと豆茶が振舞われた。

天元教主が「聖教」に立ち、人と人のつながりが希薄な昨今を憂い、「つながりとは、互いに目線を合わせて、相手を思いやり、尊び、重んじることです」と述べた。また、今年一年の無病息災を願い、「より良い生活を送るためにも、常に感謝を忘れずに毎日を過ごせるよう、お互いに精進してまいりましょう」と呼び掛けた。

この後、護摩祈祷に移り、各九星の「星祭御真言」を唱えながら、護摩木を火に投入し諸願成就を祈願した。

反省、感謝、実行 世の中の役に立つ

修養団捧誠会

修養団捧誠会（出居徳久総裁）は2月2日午後2時から、東京・池袋の本部で「追儺式」を執り行った。袴（かしも）を付けた歳男、着物姿の歳女らが、仮装した「お福さん」に続いて入場。礼法を行い、開式した。出居徳久総裁が「いのりのことば」を奏上。修祓の後、出居総裁と役員ら、歳男・歳女が玉串奉奠を行った。

出居総裁があいさつ。冒頭、「一粒の お豆に感謝 福頒（わかち）」と詠み、素晴らしい晴天に恵まれ、近隣住民を含む多くの会員らが追儺式に参列したことに感謝を述べた。

福頒に移り、出居総裁の「鬼は反省、内は感謝、福は実行」の掛け声で、歳男・歳女らが会場に広がり、福豆、みかん、餅を参列者に手渡していった。掛け声は、悪い心（心の中の鬼）を反省し、改め、感謝の心で実行することにより、福を頂くという教え。また、豆はまめに働く、みかんは「未完」であるので人格完成に努力する、餅は温かく柔らかくねばり強くとの意味がある。また、厄年も「役に立つ」ようにという願いが込められている。出居総裁や役員も歳男・歳女らとともに福頒を行い、一人ひとりに声をかけた（写真）。

閉式の後、歳男・歳女には直会の席が設けられ、懐かしい思い出話や近況の報告を行い、楽しいひと時を過ごした。

教えに沿い心を整え健康に

法公会

法公会（榊原光徳会長）は2月2日午前10時から、愛知県知立市の総本山で「節分厄除祈願祭」を執り行った。

聖仏舎利宝塔と教祖殿で、榊原光徳会長を導師に、宣教師と読経を行った後、本殿に移動し、厄除祈願の読経を厳修。榊原会長と宣教師が、信者一人ひとりの名前を読み上げて厄除祈願を行った。

婦人部による御詠歌奉納、会員綱領唱和、昼食などの後、榊原会長が「法話」に立ち、心の在り方について説き、心の状態が身体や行動に及ぼす影響が非常に大きいとして、「私たちの身体は心が支配していると理解して下さい。身体を健康に保つために、教えに沿って心を整え、きれいにしていくことが何よりも大切です」と説いた。

この後、袴（かしも）姿の来賓や会員代表者が、本殿内の参列者に向かって「福は内」と大きなかけ声を上げて豆をまいた（写真）。

生活と心の改善に取り組む

福聚の会

福聚の会（杉浦妙周会長）は2月2日午前10時から、愛知県知立市の本部・大乗山法隆寺で「令和2年節分会」を執り行った。

参列者で満堂となった中、杉浦妙周会長が式衆4人と共に入場し、読経供養。この後、15人の祈祷者に向かって厄払いの「ご祈祷」を行った。

杉浦会長があいさつに立ち、今年は「継続の中の改革の年」であり、「生活や心の改善ができた人は数年後に良い結果がやってきます」と今年の心構えを説明した。そして心の鬼である怒りや愚痴、贅沢をしたいと思う心を追い払い、「何事にも感謝することが福を呼び込む方法です」と豆まきの意義を説明した上で、「この節分を機会に、今年は生活や心の改善に取り組んでいきましょう」と参列者に呼び掛けた。

会場後方から「赤鬼」が登場すると、子どもたちから歓声が上がり、赤鬼は子どもたちに対して、一年間、親の言うことを聞き、良い子でいるように諭した。

この後、教団役員と厄除け祈願者らによって豆まきが行われ、参列者は豆がまかれる度に大きな歓声をあげ、豆に手を伸ばした（写真）。

祓幣で安全祈願 月末まで参拝続く

日本神宮本庁

日本神宮本庁（中島秀典管長）は2月3日午前8時半から、北海道帯広市の帯広明神大社で「節分厄祓祭」を斎行した。今年は積雪量が少ない冬となり、境内の積雪は3㌢ほど、午後3時過ぎから夜にかけて久しぶりに降雪があったなかでの節分厄祓祭となった。

中島秀典管長はじめ神職5人が本殿に上がり、参拝者一人ひとりの名前を丁寧に読み上げ、「祓幣」を用いて一年の安全祈願祭祓いを行い、「御札」を授与した。また、厄年の者には「御守り」「破魔矢」を授与。夕方まで千件近い家族が訪れた。

また、3日以降も参拝者が続き、2月いっぱいは多くの参拝者が来社する。

仏性を育てることが懺悔

大慧會教団

大慧會教団（石倉寿一次代会長）は2月3日午前11時半から、大阪府堺市の本殿講堂で「第69回節分祭」を執り行った。

慶白文奏上、大乗経典奉読の後、石倉寿一次代会長が真剣による「お究呪の法」を行い、病魔、悪魔退散、厄払い、諸願成就を祈願した。

桂支部の桂彌惠子支部長と第六支部の井上純子副支部長による体験功徳決定の後、石倉次代会長が「ご法話」。今年の修行経典である法華三部経の「佛説観普賢菩薩行法経」について、「教えでは、全ての人間は仏になれるといいながら、私たちは煩悩にとらわれています。その煩悩にとらわれないように自らの仏性を育てていくことが懺悔です」と解説した。

また「佛説観普賢菩薩行法経」を読誦することで仏に懺悔を受け取ってもらえるとして、「長いお経ですがしっかり読誦させていただき、仏様に近づけるよう共に頑張りましょう」と呼びかけた。

その後、「福寿豆撒の儀」に移り、白衣を着た石倉次代会長らが整列し、題目を唱え福豆に向かい祈祷。紙袋に入った福豆を「南無妙法蓮華経、福は内」の掛け声で堂内の隅々にまでまいた（写真）。

人間教育、心づくりなる信仰が大事

大和教

大和教（保積敬子教祖）は2月3日の午前11時過ぎから、宮城県塩釜市の本廳で「節分祭」を執り行った。

太鼓の合図により開式。斎員が入殿し斎主の保積敬子教祖が一拝の礼、嗣祖（つぎおや）の保積紋子氏が祓詞を奏上し大麻祓を行った。斎主の祝詞奏上に続き、斎主と斎員らにより厄年の男女の名前が読み上げられた。続いて斎主と役員、来賓、厄年の男女が玉串を奉奠した。

保積敬子教祖があいさつに立ち、「人生百年時代と言われますが、黒星の年の方が多い。人知の及ばざる厄難を祓い、つつがなく過ごしていただきたい」と述べた。また大神の言葉を伝えた。大神は、現代社会が目先の小事にとらわれ、大事を見失っていると憂い、「人間教育、心づくりなる信仰が大事。己で厄難をつくることなきよう」との言葉を述べ伝えた。最後に保積教祖は「世のため人のためにはたらき、大神様に喜んでいただけるよう精進してください」と説いた。

この後、修練道場に移動し、豆まき。抽選会のあと、参列者全員が交互に豆をまき、にぎやかな節分祭となった（写真）。この日夕にも豆まきが行われた。

良い日が訪れるよう祈念

天真教

天真教（神出修二教主）は2月4日午前10時から、三重県伊賀市の平安城神殿で「星祭祈願祭」を斎行した。

天津祝詞の奏上、修祓などの後、神出修二教主が祈願内容と祈願者の名前を一人ずつ読み上げ、「星祭祈願祭祝詞」と「特別祈願文」を奏上し、諸願成就を祈った。

この後、神出教主の先導で「みかぐら歌」を斎員の鳴物に合わせて参列者全員で奉唱し、各祈願の代表者が玉串を奉奠した。神出教主を導師に、拍子木に合わせて「天真大真義文」を読誦。信徒が「福寿旗」を掲げ「讃仰歌」を奉唱し「般若心経」を三回唱えた後、「七福の鈴のお授け」に移り、神出教主が金色の鈴のついた御幣を信徒一人ひとりに授けた（写真）。信徒らは低頭して両手を差し出し、清々しい鈴の音を受け、身を清め「御真言」を唱えた。

「福寿豆まき」では、槍持侍と薙刀持侍が「鬼は外」と豆をまいた後、信徒代表らが「福は内」と唱えながら、参列者に豆をまいた。この後、神出教主が各種お守りやお札の説明を行い、「良い日が訪れますようにご祈念申し上げます」と述べ、祈願者らに授与した。

直会の後には、毎年恒例の「初笑い福引大会」も行われ、和やかなひと時を過ごした。

五穀豊穣の祈年祭 3つの特徴を説く

玉光神社

玉光神社（本山一博宮司）は2月3日午後2時から、東京・井の頭の同神社で「節分祭」を執り行った。

玉光大神への一拝に始まり、年神（大自然を育む神）を迎える「御降神願い」などを行った。斎主の本山一博宮司が祝詞を奏上、米などの穀物の実りを黙祷し祈念。本山宮司と参列者が玉串奉奠を行い、祭儀を終了した。この後、年男・年女が神殿や拝殿はじめ境内各所に豆をまいた（写真）。

本山宮司が「御講話」。玉光神社の節分祭は五穀豊穣を願う「祈年祭」としての性格が強く、①「鬼は外」を言わない②厄払いではなく豊穣を願う祝詞を奏上する③玉光大神（主祭神）ではなく、年神を招き祭事を行う―との三つの特徴があると説明。また、玉光大神を創造主として信仰しており、「創造主と被造物（人や創造主以外の神々）の間には超えることのできない違いがある」と述べ、他方で年神をはじめとする神々を敬うことも必要と説いた。

玉光神社の信仰では、この創造主信仰（一神教的な信仰）と神々への信仰（多神教的な信仰）を両立させていると話し、「二つの在り方を皆さんが実践していることを自覚してほしい」と参列者に呼びかけた。

「御教話」を行った。豆蒔行事でまく豆は、芽が出ない炒豆（いりまめ）であることを説明し、「炒豆をまくのは、私たちに悪いことの芽が出ないようにとの願いを込め、厄を落とし、お大國様のお力をいただけるようにするものです」と述べた。また豆を用いるのは「豆で達者（よく体を使い元気に働く）」でありたいとの験担（げんかつ）ぎであることも説明した。

さらに保積教主は小槌を手にし、「大地は万物のいのちを宿すが、小槌をさくさくと振ることでそのいのちを掘り起こす」と述べ、本殿に供えてある小槌を用いて「天地の神々の恵みをいただいてほしい」と参列者に呼び掛けた。

続いて豆蒔行事が執り行われ、特設舞台から「おだいこくさま」の衣装をまとった豆まき所役が次々と登壇。「福は内、福は内、鬼は外、鬼は外、稔れ、稔れ、稔る」との力強い掛け声と太鼓の音に合わせ、祈祷殿内に威勢よく豆まきが行われた（写真）。

この後、「お楽しみ抽選会」が賑やかに行われた。

炒豆の意味と願いを説く

大和教団

大和教団（保積秀胤教主）は2月9日午前10時半から、仙台市青葉区の大國神社祈祷殿で「節分厄除祭」を斎行した。

斎主の保積秀胤教主と斎員が入殿し、開祭詞の後、修祓之儀、斎主による祝詞奏上と豆打之儀、祭員による弓打之儀が厳かに行われ、保積教主と来賓らの玉串拝礼が続いた。

祭儀を終え、保積教主が

「シェアハウスこうじゅ」(旧関西光澄館)がオープン

支縁のまちネットワークがシンポ

宗教施設と地域社会の連携に向け

支縁のまちネットワーク(共同代表=宮本要太郎関西大学教授)は2月7日午後6時から、大阪市の金光教大阪センターで「シェアハウスこうじゅ」のシンポジウムを行った。

「シェアハウスこうじゅ」は、生活困窮者の自立を支援するための共同住宅(有料)で、2018(平成30)年の3月に閉鎖された立正佼成会の関西光澄館(学林光澄の学生寮、大阪・豊中市)を再活用したもの。2月1日に開所式と内覧会が催された。同施設は宗教者と研究者で構成する「支縁のまちネットワーク」の協力を得て、大阪市で生活困窮者を支援する一般社団法人・大阪希望館(岡本友晴代表理事)が運営する。

入居者の受け入れやサポートなどの運営は大阪希望館が担当し、事業の大枠の決定や財務、助言・協力、入居者と地域社会とのつなぎ役を関西光澄館運営協議会(代表・宮本要太郎関西大学教授)が担当。同協議会には立正佼成会の豊中教会と大阪教会、金光教羽曳野教会、「支縁のまちネットワーク」が参画する。

豊中市のシェアハウスこうじゅ(旧関西光澄館)の外観

今後の運営、地域社会との協力など意見交換

7日のシンポジウムではパネリストに大阪希望館の岡本代表理事、支縁のまち羽曳野希望館の渡辺順一代表、立正佼成会中央学術研究所の相ノ谷修通学術研究室長が登壇。司会は宮本要太郎関西大学教授が務めた。

宮本氏のあいさつに続き、岡本氏が発表。大阪希望館の概要について触れ、これまでの活動を説明。きっかけは、リーマンショックによる生活困窮者、いわゆる「派遣切り」に遭った人々のセーフティーネットの構築に努めたことで、生活支援のみならず就労支援にも力を入れてきたことを述べた。また、シェアハウスこうじゅの運営について「立正佼成会豊中教会はもとより、地域社会と連携し、協力を得ながら運営していきたい」と抱負を述べた。

相ノ谷氏は立正佼成会の紹介をした後、関西光澄館について、2006(平成18)年に竣工し、当初30年間の運用を考えていたが、学生の減少に伴いやむなく閉鎖した経緯を説明。学生寮として使用していた当時は、相ノ谷氏が月に1度寮生に対して面談等をしていたこともあり「非常に思い入れのある施設。それが新たに使用されることはとても嬉しい」と語った。

その上で、「光澄」という言葉には、庭野日鑛立正佼成会会長の「世に光を澄ぐ人に育ってほしい」との願いがあり、「苦しみの中から自らの尊さに気付き、入居者に巣立って行ってほしい」との思いを語った。さらに立正佼成会として「前面に宗教色を押し出さず支援し、弊会の豊中教会も後方支援には積極的に関与していく」と述べた。

渡辺氏は、今回のシェアハウスこうじゅの運営形態が、他の宗教団体や外部の団体と協力する中で、「どのように展開していくのか注視したい」と述べた。

続いてスライドを用い、「宗教の公共性」について解説。大都市圏におけるホームレス問題は「日本全国にある宗教団体の包摂力が低下したことも一因」と指摘。その上で、行政による専門性を持った支援活動にのみ依存するのではなく、宗教団体が率先して支援活動に参画し、人の痛みに寄り添い、分かち合うことの重要性を訴えた。

そして公共性とは公の〝下請け〟で活動することではなく、「私たち宗教に携わる者が人々の痛みと繋がり、『助けて』と声を出す人々に寄り添うことこそが公共性」との持論を展開した。

続いて発表者と司会者、参加者を交え、地域社会や他の宗教者との連携について質疑応答が行われた。

特に今後、宗教界ではシェアハウスこうじゅのように、宗教施設を他団体に貸し出し、新たな事業を行うケースが増えていくのかという質問について、宮本氏は研究者の立場から、「今回のケースは試金石」で、同施設の成否が、これからの状況を左右するのでないかと分析した。

また、「政教分離が宗教の公共的役割を狭め、地域や社会との関係が希薄になった結果、孤立や無縁社会を生み出した」と指摘。宗教の公共性を考える上で、同施設がモデルケースになるとの見解を示した。

この後、今後の施設運営や、宗教・地域との関わり、生活困窮者の入居及びケアなどについて活発な意見交換がなされた。まとめとして宮本氏は、同施設が「宗教の可能性を引き出すような場になることを祈りたい」と結んだ。

今後の施設運営などについて活発な意見交換がなされた

アッザ・カラム氏――

国連やNGO代表と会合

平和に向けた諸宗教と国連/諸団体のパートナーシップ

WCRP国際委員会の次期事務総長のアッザ・カラム氏は1月30日午前10時から、東京都渋谷区のフォレストテラス明治神宮で、国連やNGO代表らと会合を持ち、諸団体との連携を深めた。

同会合は、WCRP日本委員会が主催したもので、「平和に向けた諸宗教と国連/諸団体のパートナーシップ」として企画された。

カラム氏はアムステルダム自由大学で宗教と開発を専門に教え、また国連・宗教と開発タスクフォースのコーディネーターを務め、世界の宗教並びに諸宗教機関を代表する600以上の組織と協働し、平和構築に向けた対話やプロジェクト開発を担当している。

会合には国連の駐日諸機関やNGO代表、関係者らが出席。はじめにカラム氏が、自身が関わってきたプロジェクトについて説明。多くの宗教者・団体が教育や福祉面でソーシャルサービスを提供しており、また宗教指導者は世論に対する影響力が大きいことを指摘した。しかし、国連機関の75%が宗教団体またはその関連機関と協力関係にあるものの、宗教組織に関する理解が進んでいないとして、「国連機関も宗教者と交流し、学びを共有し、より一層のパートナーシップを結んでいくべき」と提言した。

この後、8団体の代表者が発言。国連開発計画(UNDP)駐日代表事務所の近藤哲生氏は、最大の喫緊の課題として気候変動を挙げ、日本でもSDGsの普及と取り組みが求められ、特に自然災害に際して被災地での宗教コミュニティーの果たす役割が大きいことを述べた。

また、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)駐日代表のダーク・ヘベカー氏は、宗教者側に国連に対してPRすることを求めるとともに、カトリック教会系の国際NGO・カリタスの長年にわたる活動実績などを挙げ、宗教者・団体の具体的な国際救援や平和構築活動についても言及した。

核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)国際運営委員でピースボート共同代表の川崎哲氏は、核不拡散条約(NPT)再検討会議が今年開催されることの重要性を語り、「核兵器廃絶へ向け、市民に対して認知をより広めていく必要がある。そのために宗教の役割は倫理、人道の面でも大きなものがある」と述べた。

このほか日本ユニセフ協会や国連人口基金東京事務所、国連世界食糧計画アジア地域事務所、シャンティ国際ボランティア会、NPO・難民支援協会などの代表らが、それぞれの活動課題や宗教者・宗教団体への提言を行った。

各団体代表者が、それぞれの取り組みと課題について語った

WCRP次期事務総長 アッザ・カラム氏が講演

宗教協力・人権課題へ取り組む

WCRP日本委員会 新春学習会

世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会(植松誠理事長、庭野日鑛会長)は1月28日午後2時から、東京・杉並の立正佼成会法輪閣で新春学習会を開催した。テーマは「WCRP国際委員会次期事務総長のアッザ・カラム教授との対話――第10回世界大会と新たな宗教者の役割」。

カラム氏は先人達の言葉を引用し、宗教への期待と課題を語った

はじめにWCRP国際委員会の次期事務総長、アッザ・カラム氏がスピーチ。カラム氏は国連人口基金(UNFPA)や国連宗教・開発タスクフォースで要職を務めている。スピーチでは国連憲章や世界人権宣言に謳われた、人の権利の尊重や平等の意味を説明し、現代においては「思想や良心、信教の自由を守るために、宗教協力による取り組みこそ重要」として、WCRPの果たす役割について述べた。

また、元南アフリカ大統領のネルソン・マンデラ氏や、ノーベル経済学賞受賞者のアマルティア・セン氏の言葉を紹介し、「自由」とは暴力がなく、教育や医療、雇用などが安定し、尊厳ある暮らしが保障されている状態であるとして、「宗教者には憐れみ、慈悲に基づく実践が求められる」と語った。

さらに「聖なるもの」からの愛や自身の信仰、平和への思いがいかに大切であるかを説明し、「宗教的感性が求められ、それをお互いに呼びかけていくこと」を求めた。

スピーチの後、カラム氏とWCRP日本委員会の植松誠理事長との対話が、WCRP事務総長代行の杉野恭一氏のコーディネートにより行われ、昨年8月ドイツで開催された第10回WCRP世界大会を振り返り、人権や信仰、日本の宗教者の役割など、カラム氏のスピーチの内容を掘り下げた。また今後の宗教間対話や協力の課題などについて、参加者の質疑も交え、議論を深めた。

―新年懇親会―

新旧会長があいさつ

全日本仏教会

全日本仏教会(全日仏)は1月30日午後4時半から、東京都港区のホテルで新年懇親会を開催した。

開会にあたり、全日仏の現在の第33期、4月から就任となる第34期の正副会長が登壇。第33期の江川辰三会長(曹洞宗大本山總持寺貫首)と、第34期の大谷光淳会長(浄土真宗本願寺派門主)がそれぞれ退任、就任のあいさつを述べた。

4月に新会長に就任する大谷氏があいさつを述べた

江川会長は2018(平成30)年11月、WFB世界仏教徒大会が日本で無事、開催されたことに謝辞と喜びを語った。また、大谷次期会長はWFB世界仏教徒大会で発表された「2018年東京宣言 慈悲の行動―生死の中に見出す希望」からSDGs(持続可能な開発目標)を挙げ、自然災害や経済的に困窮している人々、差別を受け悲しみにある人々に対し、全日仏や加盟教団が仏教者として支援し、東京宣言の具現化を進めていることを示した。

そして日本の各宗派が「それぞれの立場を尊重し、協力し合い、仏陀の『和』の精神を広く発信し、世界のすべての人々が心豊かに生きることのできる社会の実現に使命を果たしたい」と抱負を述べた。

続いて日本宗教連盟(日宗連)の岡田光央理事長が祝辞に立ち、全日仏が日本の伝統仏教界における唯一の連合組織で、日宗連の構成団体として、仏教文化の宣揚と世界平和に寄与することを目的として事業活動を進めていることに敬意を表した。

そして一昨年のWFB世界仏教徒大会の「東京宣言」は仏教のみならず宗教各派の垣根を越えて協働すべき目標であることや、「慈悲の行動」に挺身することを宣言したものとして、「今日、恐るべき無明のやみと人間疎外が亢進する中にあって『慈悲の行動』即『捨身実践』こそが、日本社会を救済する唯一の道であることを私は信じて疑いません」と讃えた。

来賓紹介の後、昨年10月の台風19号で大きな被害を受けた愛媛県仏教会への義援金手交、今年10月の第45回全日本仏教徒会議・島根大会の案内が行われ、第33期の藤田隆乗副会長(日韓仏教交流協議会会長)の発声で乾杯。懇親会は歓談の中、各政党の仏教議員連盟から政界関係者の紹介などが続いた。

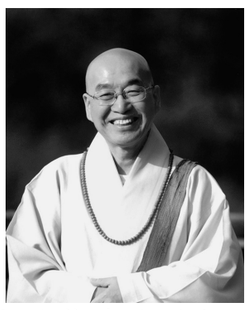
第37回庭野平和賞 発表

韓国の仏教僧・法輪氏へ

国内外での社会活動を評価

庭野平和財団(庭野浩士理事長)は2月17日、京都市内のホテルで記者会見を行い、「第37回庭野平和賞」を韓国の在家仏教教団・浄土会の創立者で禅師の法輪(ボプニュン)氏(66)に贈呈することを発表した。庭野平和賞は、宗教的精神に基づく世界平和の推進に顕著な業績をあげた個人や団体に贈られるもの。

法輪氏は1953年、韓国蕨州(クルジュ)郡生まれ。16歳で韓国の禅系仏教宗団・曹渓宗で出家。35歳で現代社会が抱えるさまざまな問題(暴力、紛争、環境破壊、貧困問題など)に対応するため、仏教の教えに基づくコミュニティーである在家仏教教団・浄土会を創立した。



浄土会では仏教に説かれる真の浄土を顕すべく、一人ひとりが心の安寧を願い、利他の実践に打ち込める仏道修行の場を提供し、その上で南北統一に向けた活動や北朝鮮への人道的支援、環境に配慮した生活スタイルの提供など、多岐にわたる活動を展開し、その輪は国内外に広がりをみせている。

また法輪氏は、貧困と飢餓撲滅に向けた国際支援団体・JTS(ジョイン・トゥギャザー・ソサイティ)、環境保全に取り組む団体・エコブッダなどさまざまな専門組織を創設。バングラデシュに避難してきたロヒンギャ難民のために10万台のストーブを届けるなど、国内外で苦しむ人々の救済を実現している。

贈呈理由では「異なる信仰や文化を持つ人々の間に揺るぎない信頼関係と善意を築く同師の努力は、その平和活動において根幹をなすものであり、他の人々への多大な影響力を持つ。同師の功績はまさに仏教徒の理想の姿として描かれるであろう」と称えている。

受諾メッセージの中で、法輪氏は過去20年間にわたる活動を振り返り、次のように述べている。

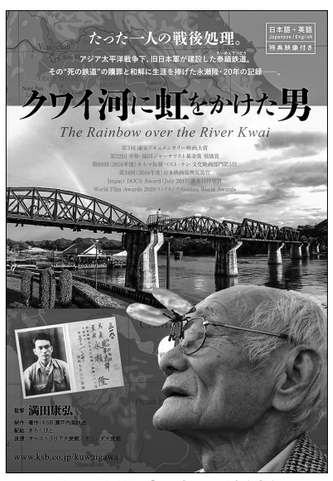
「根強い敵対心の解決なくして、人道的支援はもとより人間としての基本的人権の保障も、その持続も実現し得ないのです。平和は社会活動の始点であり終点です。平和が社会の必須条件であり、逆に言えば平和は社会運動の究極の結果であります」

贈呈式は6月3日、東京都港区の国際文化会館で挙行され、賞状と顕彰メダル、賞金2千万円が贈られる。また受賞者による記念講演も行われる。

映画

クワイ河に虹をかけた男

アジア太平洋戦争中、旧日本軍がタイとビルマ(現ミャンマー)の間に建設した「泰緬(たいめん)鉄道」に陸軍通訳として関わり、その犠牲者の慰霊と贖罪に奔走した永瀬隆氏を追ったドキュメンタリー映画『クワイ河に虹をかけた男』(満田康弘監督、制作・著作=KSB瀬戸内海放送、120分)。このほど同作品のブルーレイとDVDが発売された。



DVDのパッケージ(表)

泰緬鉄道 犠牲者の慰霊に

生涯を捧げた永瀬氏の記録

ブルーレイ・DVDが発売

「泰緬鉄道」は415キロメートルに及ぶ軍事鉄道で、過酷な条件下での突貫工事で連合軍の捕虜1万3千人、アジア人労務者数万人の犠牲者を出し、〝死の鉄道〟とも呼ばれた。永瀬氏もこの泰緬鉄道の建設に関わったことから、戦後、その生涯を犠牲者慰霊に捧げることを決意した。永瀬氏の地元、岡山県KSB瀬戸内海放送は、慰霊の旅を続けてきた永瀬氏の晩年を20年にわたり取材。1991(平成3)年以来、7本のドキュメンタリーを制作し、映画はその集大成としてまとめられたもの。制作には円応教と善隣教、大慧會教団、立正佼成会、新宗連青年会が協賛した。

永瀬氏は新宗連青年会とも関係が深く、第1次アジア青年平和使節団(1974年)で現地案内を務め、その後も共にタイで慰霊を行ってきた。永瀬氏の没後、2017(平成29)年3月には、「第50回8・14式典・終戦70年特別事業」として、同映画の上映会を開催し、永瀬氏の平和に対する思い、新宗連青年会の平和活動についてあらためて学びを深めた。

今回のブルーレイ・DVD制作は、〝たった一人の戦後処理〟に生涯を捧げた永瀬氏の思いと活動をより多くの人々に伝えるべく企画されたもの。

販売価格はブルーレイが3000円、DVDが2500円。ブルーレイには英語版と特典映像が付録となっている。また、上映権付きのブルーレイは3万5000円で販売。価格はいずれも税別。問い合わせはKSB瀬戸内海放送報道クリエイティブユニット高松本社(電話087―862―1119)。映画オフィシャルサイトはhttps://www.ksb.co.jp/kuwaigawa

新宗連加盟教団、青年会が協賛